Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2003.11
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.26

CONTENTS

・ フィリップ・サルーン講演会
・ 20 年前に、ゾーンシステム研究会は存在していた
・ 中島秀雄写真展「Ghost Town, Bodie」記憶の街
・ 八丈島撮影会
・ 静物撮影会報告
・ ゾーンシステム研究会定例会日誌
・ インフォメーション

フィリップ・サルーン講演会

荒井崇

・場所：横浜ランドマークタワー13F
　　フォーラムよこはまセミナールーム２

２００３年４月２７日（日）フランスのプリンターでありフォトグラファーである、フィリップ・サルーン氏の講演会が開催された。

フィリップ・サルーン氏は、ロベール・ドアノー、エドゥアール・ブーバ、イジス、ウィリー・ロニスなど、著名な写真家のプリントを行ってきたプロのプリンターであると同時に、写真家としても精力的に活動している。今回は５回目の来日。過去多数の講演会や写真展を日本で行っている。

本講演会は、昨年のゾーンシステム研究会写真展に来訪された、G.I.P 社、倉持悟郎氏の協力で実現したものである。G.I.P 社の倉持悟郎氏は、主に海外の写真家を日本に紹介してきたエージェントであり、今までに数多くの著名作家の展覧会を日本で実現している。

奇しくも数年前ペンタックスギャラリーで写真展を行った際、筆者は、フィリップ・サルーン氏自身のオリジナルプリントを購入している。その際、G.I.P の方に大変お世話になった記憶がある。（ちなみにそのときの担当は、倉持悟郎氏ではなく倉持博氏であった。）

本来、フィリップ・サルーン氏はフランス在住なので、フランス語で講演すべきものだが、日本人にとって英語のほうが親しみやすいということで、敢えて英語で講演を行っていただいた。英語の通訳は倉持悟郎氏にお願いし、非常にわかりやすい講演となった。

まず最初に、フィリップ・サルーン氏がプリンターとして、今までにプリントしてきた作家の作品をスライドで紹介。作家自身のポートレートも同時に見せてくれた。（一部の作家は除く）もちろん、フィリップ・サルーン氏自身の作品もこの中に含まれている。

１．アオロ・ゾンリーノ（ポルトガル）

現在パリに住んでいる作家で、自分自身の人生を主題にし、地中海に住むイスラム教の人々をモチーフにしている。彼は、暗闇が光の役割を果たすと考える。プリントを、ドラマチックに暗く焼いて欲しいと要求されたことがあるという。

写真家の解釈をしっかり受け止めてそのままプリントすることが、プリンターとして重要なことであるとのこと。

２．マックス・ファン（オーストラリア）
アジアを旅行しながら撮影する作家である。

３．クロード・バトー（フランス）
２０年前４０歳の若さで癌で亡くなった女性の写真家。自分の家族や日常をモチーフに撮影したという。当時のミッテラン大統領は、彼女の写真がお気に入りで、招待状にクロード・バトーの写真を使っていたそうである。

４．ロベール・ドアノー（フランス）
パリを撮影した叙情的なドアノーのスナップショットは、日本でもよく知られている。彼はパリ以外一切撮影をしなかったという。フィリップ・サルーン氏は、何と２０年間、ドアノーのプリントを担当したとのこと。

５．サビヌ・バイス（スイス）
旅をするのが好きな、現在７９歳になる女性写真家。彼女の夫がアーティストであったため、ジャコメティをはじめ著名な美術家の作品を残している。また、社会派の作品も残しており、ファミリー・オブ・マンにも出品している。

６．エドゥアール・ブーバ（フランス）
単純明快な描写を行う写真家。一方で、古典的な情景を表現するのも得意であったという。奥さんのポートレートや、枯葉を羽織った少女の写真がよく知られている。彼は、自然光よる光の表現にこだわっていたという。雪の中で遊んでいる作品のプリントを依頼された際、「人物の顔は雪の反射で下から照らされるので十分注意して欲しい。」と言われたそうである。
約１０年前、筆者は、小田急美術館でのエドゥアール・ブーバ展にて、２人の少女が写った１枚のプリントを購入したことがある。（ちなみに当時ブーバのプリントは半切で１５万円、ただし枯葉を羽織った少女の写真のみ破格値だった記憶がある。）昨年筆者が開催したコレクション展のDMは、このイメージを使用したものだ。講演後、フィリップ・サルーン氏にこのDMを見せたところ、写っていた少女は後のミス・パリになったそうである。
昨年、ツァイトでの展覧会のため来日予定だったエドゥアール・ブーバは、残念ながら一昨年、この世を去ってしまった。

７．ウィリー・ロニス（フランス）
著名な社会派の写真家。息子が紙飛行機で遊んでいるイメージと、別荘で撮影された奥さんのヌードがよく知られている。
後年、皮肉にも息子さんは、飛行機事故で亡くなってしまったそうである。

８．ジャック・アンリ・ラルティーグ（フランス）
もともとは画家であったが、６０代になってからリチャード・アベドンが彼の写真を見初めて有名になった。
ラルティーグは、裕福な上流階級の家庭に生まれ、小さい頃からカメラを使って写真を楽しんでいた。言わばアマチュア写真家である。裕福な家庭でしか楽しめない、飛行機や自動車のレースに接し、さまざまな名作を残している。動きを止めて撮影するのが得意であり、その撮影技術は群を抜いていたという。

９．セイドー・ケイタ（マリー（アフリカ））
現在８０歳前後になる写真家。１３ｘ１８ｃｍの大型カメラを使用し、コンタクトでプリントを制作する。シャッターは使わず、キャップをはず

して１枚しか撮影しないそうである。にもかかわらず、撮影されたポートレートは驚くほど表情がすばらしい。彼のモデルを惹きつける才能は人並み外れたものがあったという。

１０．コーネリウス・オーギュスト
（ガーナ（アフリカ））

７５歳で５年前に亡くなった写真家。スタジオやデーライトで撮影する独特のポートレートが彼の作品の特徴。オーギュストの作品に多く見られるポートレートは、自分の大切にしているものといっしょに写ったものが多い。これはアフリカにおける、写真を撮ってもらうときの一種の習慣であるという。

１１．ドゥパラ
（ザイール：キンサシャ（アフリカ））

ベルギー植民地時代の、夜のナイトライフを撮影してきた写真家で、２０年前に亡くなっている。屋外でのスナップショットにも定評がある。

今は、妹さんも亡くなってしまい、ネガがどこにあるかわからない状態であるという。

１２．マリック・シディベ（マリー（アフリカ））

アフリカで、ハッセルブラッド賞をもらった最初の写真家。現在６６歳になる。
（ちなみに日本では、濱谷浩さんが受賞している。）
彼は、プライベートパーティーを多く撮影している。ダンスで喜び、悲しみを表現するアフリカの民族性が非常によく表現されている。

１３．フィリップ・サルーン（フランス）

最後に、フィリップ・サルーン氏自身が写真家として撮影した作品を、スライドで紹介。
フィリップ・サルーン氏は、動きのあるカットが好きとのこと。ユーモア溢れる作品が多い印象を受けた。

またフィリップ・サルーン氏は、写真家である植田正治氏と交流を持っていた。１９９５年から２０００年の間に３回、鳥取砂丘を訪ねたそうである。その際フィリップ・サルーン氏が撮影した植田正治氏のオマージュを、スライドで見せてくれた。故植田正治さんの元アシスタント池本氏の協力で撮影したそうだ。そのイメージはユーモアたっぷりの作品で、故植田正治さんを偲ばせるものであった。現在、これらの作品は、米子の植田正治美術館で「ボンジュール・ショージ・ウエダ」と題して展覧会を行っているとのことである。

植田正治さんのようなシュールな写真は、しばらくの間、日本ではなかなか評価されずに来てしまった。植田さんはまずフランスで評価され始め、アルル写真フェスティバルに招待されたあたりからようやく日本でも評価され、米子の美術館設立に至ったのである。フィリップ・サルーン氏は、フランスで活動している写真家ということもあり、植田正治さんに対する思いは日本人よりもはるかに大きいのではないだろうか。

スライド上映後は、フィリップ・サルーン氏の持参したオリジナルプリントを見せていただいた。

ブルーメンフェルド／イジス／エドゥアール・ブーバ等著名作家。むろんフィリップ・サルーン氏自身のオリジナルプリントも披露してくれた。いずれもすばらしい貴重なプリントばかり。思わず息を呑んでしまう。

フィリップ・サルーン氏は、ブルーとグリーンの２色光源を用いてマルチグレードを焼くそうである。中島先生と同じ方法だ。また、印画紙は

富士フィルムのレンブラントが好きだそうで、いつも日本から直接取り寄せるとのこと。現在、残念ながらフランスでは手に入らないらしい。

　ところで冒頭にも記述したが、筆者は数年前に、フィリップ・サルーン氏のオリジナルプリントを購入している。古城のような建物の前でブタが戯れている何とも奇妙でユーモラスな作品だ。この作品も当日披露していたので、なぜこんな光景に出くわしたのか聞いてみた。答えは、「たまたま遭遇した。」ちょっと拍子抜けしてしまったが、それが事実らしい。

　今回、倉持悟郎さんの協力により、希望者にはフィリップ・サルーン氏のオリジナルプリントを、特別に購入させていただけることになった。これで日本にも、フィリップ・サルーン氏のオリジナルプリントがより多く残ることになりそうである。

20 年前に、ゾーンシステム研究会は存在していた

中島秀雄

会期中多くの来訪者と対話する機会をもった。展覧会がスタートして 3 日目、ジーンズに黒のジャケットを着て現れた彼は 50 歳前後、会場を一回りした後、“アダムスやエバンスが好きなようですね”と話してきた。この一言は皮肉にも聞こえるが、きっかけが何であれ何か話したいという相手の気持はすぐに分かった。彼は現在コマーシャル写真を手がけ、以前は白黒写真をやっていたことを話した。しかし、私は彼の言葉に、何か話しづらさを感じた。しばらくして、“又来ます”と言って出て行ってしまった。次の日、彼は再びやってきた。

“昨日は失礼なことを言ってすみません”と切り出した。２０数年前、友人達とゾーンシステム研究会を立ち上げ、賛同を得ようと動き回ったが結局お金にならず、３年くらいで解散してしまったことを話した。彼は、アダムスがまだ活発に動いている頃、ヨセミテ公園のワークショップに参加した。カメラを持たず一日中フレーミングの訓練をしたこと、フードの重要性、コールドライトの特性を学んだこと、アダムスの写真テクニックであるゾーンシステムを興奮しながら学び、これこそ日本には無い写真テクニックで、自分がこれを日本に広めていくことに夢を託し帰国したことを話した。帰国後は、第一線で活躍している何人かの写真家を尋ね、ワークショップの話やゾーンシステムの話を持ち出して賛同を得ようと動いたようで、細江スタジオにも出向き、そのとき私を見かけたことも話した。私はまったく覚えていない。ワークショップに参加し、そこで得たものを生かすことができなかった残念な気持が言葉より彼の目線や動きから感じた。彼は最後に私の写真を見て“背筋がピントし、再びモノクロ写真を始めたい”と言って会場を後にした。

私は、すでに同じ研究会があったことに驚き、複雑な気持になっていた。彼が立ち上げた研究会がもし続いていれば、我々といつか出会うことになったかもしれない。あるいは、我々の研究会は出来なかったかもしれない。彼の写真活動に賛同者が現れなかった理由は簡単で、自ら作品を作らなかったことだ。ワークショップの経験やアダムスのテクニックを披露したところで賛同は得られない。自らの作品にゾーンシステムが絶対必要なことを証明していれば、事は大きく違っていただろう。

もう一人は、街の写真屋にあったＤＭを見て来てくれた人で、現在は全日空に勤めている方です。慶応のグライダー部のリーダーを経験し、現在もグライダーのインストラクターをしていると言う。かつてグライダー操縦の腕を上げるため、米国のネバダ州訓練場に出向いたときのことだった。教官から飛行コースの指示があり、そのときボーディ上空を飛び、街を写真に撮ることで上空を飛んだことを証明せよという課題が出た。そのとき地図を見て、初めてボーディを知った。この日は、いつものようにセスナ機のワイヤーに引っ張られ、真っ青な上空に吸い込まれていった。グライダーはエンジン音や振動もない、唯一ヒューというキャノピーに流れる空気音だけの静寂の世界。これは操縦する者だけが味わえる、たまらない時間だと氏は言っていた。しばらくして決められたルートに乗り、狭いグライダーの操縦席からキャノピーを通してボーディの街が見えてきた。古びた、白茶けて汚れた街でいったいどういう街なのか強い印象をもったようだ。安定した気流の中での飛行は、操縦桿から手を離しても特別問題はなく、両手でカメラを持ちキャノピーにカ

メラのレンズをつけて何枚か撮った。指定された距離と高度と滞空時間を消化して無事空港に着陸し、写真を教官に渡したと語っていた。

その後彼は上空から見たボーディの街に何か引き付けられる物を感じ、レンタカーで訪ね、ボーディについて書かれた本を米国の本屋で買い求めている。私が飛行機に興味を持っていることは皆さんもご存知の事､彼との話は１時間に渡り、その後、四谷でのフロアーレクチャーにも参加していただき、ボーディについて書かれた本を何冊か借りることになった。

子供の頃多摩川の河原にグライダーが着陸するのを見てビックリしたのを覚えている。グライダーを見たのは初めてで、石ころだらけの河原にどうして着陸できるのか不思議でたまらなかった。自転車をとばし機体に近づこうと懸命に走ると、そこにはアスファルトの滑走路が長く延びていて、反対側の堤防から見ていた私にはそれが見えなかった。読売新聞社のビーチクラフト用の滑走路だと後で分かった。プロペラのないスマートな機体に興味を持ち、それ以後グライダー制作にはまり込んだ時期があって、何機か作ったがうまく飛ばなかった。

日本製グライダーはすでになく、性能のいいグライダーはドイツ製になっているとのこと。デザイン、設計をドイツが行い、機体組み立ては周辺の国々が請け負う形になっている。また、機体そのものはグラスファイバーとプラスチックからなっているといっていた。

尚、この原稿が会報に載る頃には展覧会は終わっていると思います。私の展覧会の成功には研究会の多くの有志の援助がありました。ありがとうございました。

中島秀雄写真展
「Ghost Town, Bodie」記憶の街

（中島先生本人の解説文より）

カリフォルニア州シエラネバダ山脈の東に広がる荒涼とした台地に、かつて一攫千金を夢見た人たちによって作られた街がある。1850 年代から 1900 年頃にかけて、カリフォルニアは金の発見に沸いた。金の発見によって荒野の一郭に突然町が出現し、ここボーディはおよそ一万人の街になった。しかし、金が掘り尽くされるにつれて人々は街を去り、やがてゴーストタウンとなった。現在は、パーク・レンジャーが駐在するだけで、水や電気もない無人の街だ。

今でも本当にそんな街が残っているのか。5 年前に見た一枚の写真に、私は強く引き付けられた。ボーディは、私がかつてよく見たアメリカ・ウエスタン映画に登場した街並そのものだった。百年もの時間に耐えたホテル、レストラン、教会、雑貨屋、酒場が当時のまま残り、今も時間が止まったままだ。カリフォルニアの乾燥した空気と、強烈な太陽に焼かれた木造の外壁やドアーのテクスチャーは美しく見えた。歪んだガラス窓から見た雑貨屋の内部には、食器、グラス、コーヒー缶、ランプがそのまま残り、当時の生活の様子が偲ばれる。

サンフランシスコからボーディまでは、車で二日間の道のり。これは、私の記憶を確かめる旅でもあり、アメリカの夢と絶望を見る旅でもあった。大型カメラを担ぎ、3 年通って撮影したモノクロ写真およそ 40 点を展示します。

会期：2003 年 10 月 14 日（火）－25 日（土）
会場：アートプラニングルーム青山

中島秀雄写真展「Ghost Town, Bodie」記憶の街 全作品 (1/4)

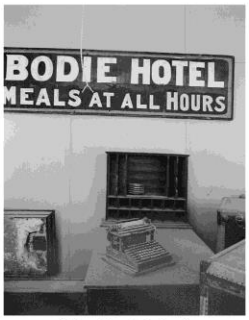
Hydroelectric Building

Chairs

Post Office

Chest of Drawers

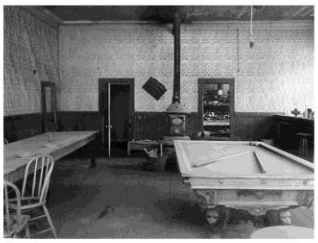
Interior



Bodie Hotel

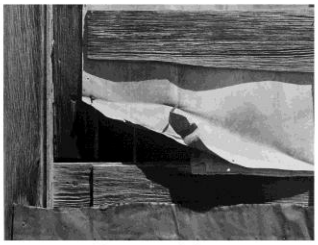
Morgue

Methodist Church


Restaurant & Bar

Methodist Church & Cloud

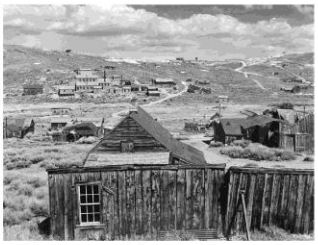
Automobile & North Hill


Composition

中島秀雄写真展「Ghost Town, Bodie」記憶の街 全作品 (2/4)

Barn

Two Chairs


Cameron House &
Factory District

Boone Store

Methodist Church &
D.V.Cain House

Fall & Winter Catalogue

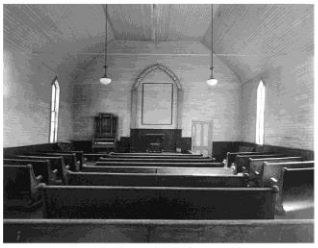
Post Office & Hotel

Rock Arch &
Chinese Residence

Quinville House

Southeast Hill & Cloud

Gravestone


Inside of Church

中島秀雄写真展「Ghost Town, Bodie」記憶の街 全作品 (3/4)

White Knob

Dining Room in Miller House

Sam Leon Bar & Barber Shop

Morgue

Catalogue "R"

Automobile & South Hill

Grand Calico Ball

Machinery (Bodie Hydropower Plant)

Cemetery

Bodie City & Southeast Hill

Crooked Roof & East Hill

Boone Store

中島秀雄写真展「Ghost Town, Bodie」記憶の街 全作品(4/4)

Residence

Garage

Machinery

八丈島撮影会

・参加者 : 中島先生、古川、田中（肇）、田中（英）、北野、橘田、岡崎、山本

２００３年５月９日（金）～１１日（日）、ゾーンシステム研究会の八丈島撮影会が行われた。

この八丈島撮影会の報告は、２００３年５月２４日の定例会での、参加者の報告をもとにして、編集者が作成したものである。

・八丈島は非常に風の強い島で、カメラの蛇腹が風にあおられて苦労した。このようなときは、傘を使用するとかなり風が防げる。
・海岸線が非常に良いので、海岸線をじっくり撮影してもおもしろい。
溶岩の流れた場所有り。（千畳敷）
・本土と形の異なる亜熱帯独特の植物が多く生息していて、恰好の被写体となる。
・底土港の波が非常にきれい。
・人口は約１万人。非常に人情豊か。
・地形は、山が２つ。その中央に空港がある。道は非常に空いている。
・レストランが少ないので、コンビニ等で弁当を調達するとよい。
・ホテル等の廃屋があった。ただしなぜか管理人が居る。
・植物公園は恰好の撮影スポット。何と入場無料で車も入れる。

撮影にはなかなかよい場所とのこと。ただし風、雨など気象条件に注意する必要があり、季節をよく吟味する必要がありそうだ。

静物撮影会報告

荒井崇

・日時：２００３年7月５日（土）
・場所：横浜ランドマークタワー１３Ｆ
　　フォーラムよこはまセミナールーム
・参加者：中島先生、小谷津、北野、松本、岡崎、田中（英）、石井、宇野、荒井、菅野（準備のみ手伝っていただきました。）

今回の静物撮影テーマは、花／ガラス／ペーパークラフトの三種。各メンバーが持ち寄った被写体を３箇所にセッティングして撮影。１箇所は窓からの自然光、残りの２箇所はフラッドランプを使用した。（機材はほとんど中島先生に準備していただいた。）

最初は花の撮影。ひまわり／蘭などメンバーが持参した花を、中島先生の指導でライティング設定を行う。レフ板代わりのホワイトボードなどで光を調整するが、なかなかうまく行かない。窓からの入射光もライティングに悪影響を及ぼしていることが判明。ついたてを設置してようやくセッティングが完成し、撮影に入った。

昼食をはさんで、ガラス／ペーパークラフトの撮影に入る。ガラスは、ワイングラスなどを並べて白バックの設定を行った。上から背面の白バッ

クシートへライトを照らし、その反射光によりグラス背面からの逆光ライティング。グラスの輪郭が黒い影となり、非常に美しい被写体が作られた。

一方ペーパークラフトは、白紙を束ねたり丸めたりして構成。白いオブジェを四苦八苦しながら撮影した。

今回も、ポラロイド５５で撮影する人が多かったが、その場で現像してしまったネガは、その場で洗浄せねばならない。（もちろん家に帰って現像するのが原則だが、試しに現場でも確認してみたくなるのだ。）今回は石井氏と松本氏が亜硫酸ソーダの入った容器を持参していたので、他のメンバーも便乗させていただいた。容器を持参した２人には大変感謝したい。

静物撮影は、あおりやライティングなど高度なテクニックが必要。特にアマチュア写真家にはハードルの高い作品作りだ。今回撮影に参加して、大変勉強になった次第である。

以下は中島先生のアドバイスです。

「静物写真撮影は自宅でも可能ですので積極的に取り組んで欲しい。食器､人形、野菜、くつ、ジャケット等何でも被写体になる。写真的な眼でながめることが重要です!!
背景の処理がキーです。シンプルで背景にもピントガ来ていればうまくいきます。」

ゾーンシステム研究会定例会日誌

2003 年 7 月 12 日（土）　　記録：荒井崇

・**出席者**：中島先生、常見、古谷津、圓子、山本、石井、田中（肇）、古川、畑

（以下内容は、記録者不在のため後日情報収集によるもの）

・次回暗室ワークの準備作業について打ち合わせを行った。
・展覧会関連で、８月末に作品決定予定。各自作品を準備しておくこと。
・今年の、川崎市民ミュージアムゾーンシステムワークショップは予算の関係上中止。

2003 年 8 月 16 日(土)　　記録：荒井崇

・**出席者:**中島先生、常見、古谷津、山本、石井、田中（肇）、古川、畑、荒井、松本、田中（英）、木下、橘田、北野、岡崎、鈴木、菊池、山下、菅野

・**作品持参者:**常見、古谷津、山本、石井、古川、畑、荒井、松本、田中（英）、木下、橘田、北野、岡崎、鈴木、菊池

・ポラロイドのパンフレット用写真に、ゾーンシステム研究会会員の作品を採用してもらった。先生が全員の作品を提出し、ポラロイドにて選定。（パンフレット９月完成予定）
・細江英公先生の講演会有り。内容は、「オリジナルプリントをいかに海外に売り込むか」に関するもの。ＰＧＩの吉野氏も同時に参加予定。（８月２６日、ＪＣＩＩにて）
・先日の暗室ワークは無事に終了。８人が参加した。宇野さんは独自のワイドネガから全紙にチャレンジした。中島先生より、暗室ワークの際は事前にワークプリントを行ってから参加するのが望ましいとのこと。
・中島先生の個展（ボディーの作品）開催が決定。アートプラニング青山にて、１０月１４－２５日。
・今年の、川崎市民ミュージアムゾーンシステムワークショップは予算の関係上中止であるが、来年は行うとのこと。今年は、IDEX でのワークショップ（新人会員のみ）を検討する。
・現在、フリーダ・カーロの映画、作品展（東急文化村）が行われている。フリーダ・カーロは著名なメキシコの画家で、写真家ローラ・アルバレス・ブラボ（マニュエル・アルバレス・ブラボの妻）が彼女のポートレートを撮っていたそうである。今回は、中島先生が所有している、フリーダ・カーロの写真集（ローラ・アルバレス・ブラボ撮影）を見せていただいた。
・ゾーンシステム研究会展覧会について
　＊日程を１日の延ばすよう、再度中島先生に、ギャラリーと交渉していただく。
　（最終日を休日にしたほうが搬出しやすいため。また、休日を１日増やして来客を増やすため。）
　＊今回は、多数の会員が作品を提出。それぞれ批評してもらい、候補作品３６点が集まった。
　＊今回の額装は、コーナー止めとする。（ドライマウントは無し）
　＊フレームサイズは従来と同一とする。（18 x 22 インチ）

2003 年 9 月 13 日（土）　　記録：荒井崇

・**出席者：**中島先生、古谷津、田中（肇）、古川、畑、荒井、松本、田中（英）、木下、橘田、北野、岡崎、山下、菅野、小野、大石（見学）

・**作品持参者：**古谷津、古川、木下、菅野、小野

・写真家の宮本隆司氏より中島先生に連絡有。宮本氏が講師をしている京都造形芸術大学通信教育の教科書にゾーンシステムの解説を載せたいとのこと。ちなみにこの通信教育は、受講者６０人、スクリーニング（実際の講義）は年３回、受講期間４年間。比較的年輩の方が多いという。

・細江英公先生講演会「オリジナルプリントをいかに海外に売り込むか」報告(2003.８)。
田中（肇）氏が参加したので話を聞いた。

＊ほとんど市場はＵＳＡ

＊オリジナルプリント販売の始まりは 1970 年前後。版画のカタログに入れたら価格が安いので売れたことが発端。

＊これまでに最も高価な作家は、フランスの古い作家で価格は１億円。スティーグリッツによるオキーフのヌードは数千万円。

＊ＵＳＡのギャラリーは、うまく作家を取り込んで市場を作っている。

＊価格設定は、まず売れる価格からはじめること。最初から価格を高く設定しないことが重要。

＊ＵＳＡでは、ヒューストンフェスティバルという作家がアピールできるチャンスがある。作家が作品を持ち寄って、先生が１５分前後の批評を行ってくれるというもの。

＊ＵＳＡの作家は、メインギャラリーを１箇所に決めて、そこから一括して出品している。（契約書により定めている。）

＊もう一人の講演者吉野氏（ＰＧＩ勤務）の論文を見るとギャラリーのリスト有り。

＊日本には、印刷が写真の本質であるとい風潮がまだ残っている。

＊写真を売り込むときはスライドがよい。

＊ニューヨークのギャラリーカタログは、現地の本屋で売っているので必見。

＊オリジナルプリントは重要なので、みなさんもできるだけ捨てないでください。とのこと。

・大石氏談（本日の見学者、Ｎ．ＹのＩＣＰで写真を勉強中の方）

＊１０月末、キュレーターがヒルトンホテルに集まる機会がある。このときに作品を売り込むチャンス有り。

＊学校の先生で、キュレーターとつながりのある人がいるので、そのコネクションを利用して売り込むこともできる。

・今回は、写真展用作品が新たに９点集まった。ジャンルとしては人物が無いので、ぜひ人物の作品を提出して欲しいとのこと。

・中島先生の写真展準備手伝いを募集。
（10 月 4 日（土）、10 月 5 日（日）新宿 IDEX にて）

Information

【売ります】

中島秀雄

・ニッコール　210mm　f 5.6

35000円

・ヴューイングフィルター／ゾーンラベル在庫あります。

【買います】

荒井崇

・ドライマウントプレス機（SEAL 社に限る）

半切サイズ（160M）又は小全紙サイズ（210M）

（状態の良いもの希望）

購入希望価格：半切サイズ 50000 円前後

小全紙サイズ 70000 円前後

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力しますので、文字高さ実寸４ｍｍ以上で御願いします。）

・パソコンの電子メール

・ウィンドウズの Word2000

・text ファイル

（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集部］　荒井　崇